



社畜勘違いストーカーの
女子大生連続孕ませレイプ
—体験版—

がら堂／どん丸

A t t e n t i o n

高校生を含む18歳未満は閲覧禁止です。

この話はフィクションです。実在の人物や団体とは一切関係がありません。

なお、この話は犯罪行為を助長するものではありません。決してマネしないでください。

本書の内容、テキスト、画像等の無断転載・無断使用を固く禁じます。

Unauthorized copying and replication of the contents of this book, text and images are strictly prohibited.

「あの、すみません。これ、貴方のですか？」

「えっ……？ あっ！ そ、そうです！ 僕のです！」

「さっき、電車で落としたの見たんです。合っててよかった」

息を切らせてスーツの男に声をかけたのぞみは、男がのぞみの顔とのぞみの手にあるものを何度も交互に見て大袈裟なほど頭を下げるのを見てほっと笑った。

つい先ほど電車の中で、のぞみはこの男が紐付きのカードケースのようなものを落とすのを落とすのを見たのだ。セキュリティカードとか、そういった類のものだろう。大学生ののぞみはアルバイトをいくつかやってそれが大事なものだと思ったので、男が電車を降りていくのを見て、自分の降りる駅ではなかったものの、ギリギリで電車を降りたのだ。

上背がある上に早歩きの男——カードには「早見健二」とあった。この男の名前だ——に追いつくためにはのぞみは走らなければいけなかったが、改札前でようやく追いつき、早見に声をかけたのである。

「何とお礼を言ったらいいか……これ無くしたら始末書だったので」「拾っただけなので、気にしないでください」

早見は二十代後半くらいに見えるが、目の下はひどいクマがあるのでもしかしたらもっと若いのもかもしれない。

苦勞しているんだろうなあ、と思いながらのぞみはぺこりと会釈すると、早見に背を向けてホームへ戻っていった。

——ほの暗い目で早見に見られているとも知らず。

「ひっ……！」

「ハアハア、わざわざ一人になって、待っててくれたんだね……♡
嬉しいな……♡」

「い、いや、来ないでっ……！」

「他の男に襲われないかって、怖かったよね♡　もう僕が来たから、
大丈夫だよ♡」

「んんっ！」

二十歳になったばかりののぞみはバイト帰りで、帰宅ラッシュと

終電の間くらいの時間の電車に乗っていたのだが尻に硬いものを押し付けられた為、痴漢だ、と電車を降りて、なんだかまだ見られている感覚に怖気立ちながら女子トイレへと逃げ込んだ。

この駅はあまり人の降りない、小さくて寂れた駅だった。快速電車が止まらないため電車の本数は少なく、無人駅一步手前のような駅だ。本来なら降りることなど無い駅なのだが、あれ以上は我慢できず、車両を変えて乗る気にもならず、のぞみは電車を降りたのだ。

無論そんな寂れた駅のトイレは綺麗なものではない。電灯は切れかけていて、便器が和式では無いことに驚くくらいだ。

そのため逃げ込んだらいいもののこのトイレも何だか怖くて、少し経ってから個室から出ようとしたのぞみだったのだが、扉を開いた瞬間、目の前に、男がいた。

それは、のぞみが知っている男だった。

以前のぞみが助けた、早見である。

なぜ、と顔を青くさせるのぞみだが、もう遅い。

早見はのぞみの体を押して個室に入り、鍵を閉めた。

もちろんここは女子トイレなのだが、ほとんど人の降りない駅で

ある。しかももう遅い時間でトイレに来る人など、いないに等しい。

「んんっ、んーっ、んーっ！」

絶望に顔を染めるのぞみに、早見は無理矢理唇を合わせてきた。

必死で唇を開かないようにするのぞみだが、早見は簡単にその唇

を舌でこじ開けた。唇と歯茎の間をべろおん♡ と舐められ、の

ぞみが驚いて口を開くと口内にも舌が侵入してくる。

舌をべろんべろん♡ と舐められ、上顎をツウ♡ となぞら

れ、終いには舌を唇に喰まれて口外に出されぢゅうぢゅう♡　と
吸われる。

涙を流しながら嫌がるのぞみは力強く抱きしめられてしまつていて、十数分にも及ぶ口内の蹂躪が終わる頃には、のぞみは抵抗できない身体にされてしまつていた。

「ハアハア、かわいいなあ♡　キス、気持ちよかつたの？　目がトロンつてしてるよ♡」

「はあ、はあ、いや、いや、はなしてっ……」

「恥ずかしがらなくて良いよ♡　もっと気持ちよくさせてあげるからね♡」

出会った時は目に憂鬱さを宿していた早見は、興奮しきつて、目をぎらぎらと光らせている。上擦った声は興奮しているのが誰が聞

いても明らかで、少し早口だ。

キスだけで腰が抜けかけているのぞみは、蓋の閉められた便座に座らされた。

のぞみは立ち上がって逃れようとするが、腰に力が入らない。

しかもそうしているうちに、早見は、のぞみの着ていたカットソーとブラジャーを一気に胸の上までたくし上げる。

すると、のぞみの大きな乳房がぶるんっ♡と揺れながら外に

出た。ずっと夢にまで見ていたその生の乳房に、早見は更に目を血走らせる。白くて大きな乳房はマシユマロのようで、シミ一つない。先端は薄い桃色で飾られていて、乳輪は少し大きい乳頭はそれほど大きくなくて、今はまだ乳輪からはそう目立っていないが、これから赤く膨らんでくるのだろうと思うと、早見はそれだけで出して

しまいそうなほどだった。

「ひっ、いやっ！」

「ああ、すごい、生おっぱいっ……♡」

「見ないで、だめ、だめっ……！」

「ハアハア♡ おっぱい、とってもエッチで可愛いね♡ 美味しそ

うだ……♡」

「あっ！ だ、だめっ、んんっ♡」

「はは、いやらしい声出ちゃったね♡ 乳首気持ちいいのかな？♡」

こんな状況にも関わらず、否、しつこいキスで身体を昂らされてしまったからか、細長いが筋張っている指で乳首を転がされ、のぞみは悩ましい声をあげてしまった。

やめて欲しくて望みは男の肩を力一杯押すが、早見は止まらず、

息を荒げながらのぞみの乳首を弄り倒す。

「あ、んんっ♡ や、やめて、だめ、あん♡」

「あはっ♡ 乳首、勃起してきちゃったねっ……♡ もっといじめ
てって可愛らしく赤くなってるよ♡」

「ちが、ちがうの♡ ああんっ♡ だめ、だめ♡」

「ハアハア、大きなおっぱいと真っ赤な乳首がすごいやらしいよ
♡」

サスサス♡ クニクニ♡ グニイ♡ コリコリコリッ♡ カリ

カリカリカリ♡

夢想した通りに真っ赤に膨らんだいやらしい乳首を興奮して好き
勝手弄る早見に、のぞみは怯えつつも完全に感じてしまい、男を押
す手にも力が入らなくなってきた。

「エッチな君にぴったりの、敏感乳首だね♡」

「や、やめて、おねがい、おねが、んあつ♡」

「ハアハア、のぞみちゃん、かわいい、かわいいよ♡」

「な、んで、名前、やあんっ♡」

「あの後、君の後を追ったんだ♡ 僕が追ってることに気づいて、

家まで連れていってくれたんでしょう？ ○○駅の北口から大通りを

通って、コンビニを左に曲がったところにあるアパートの二階の部

屋に……♡」

「ヒッ……！」

のぞみはすぐに悟った。

この男は、早見は、ストーカーである。

以前のぞみが落とし物を届けた時にのぞみに執着し出し、すぐに

ストーカーとなったのだ。しかも「のぞみも自分に気がある」と勘違いしているタイプのヤバめの。

家まで知られていること、そして一ヶ月もの間何も気づかなかったことにのぞみは怯える。性格の良いのぞみはよく友人に「お人好しも大概にしないといつか大変な目に遭うよ」と言われつつ流して、それを大いに反省した。しかし反省した頃にはもう遅いのがこの世の常である。

「次の日は仕事休んで朝早くに君の家まで行っちゃったよ♡ 一緒に大学まで行って、授業終わるまで待ってあげて、バイト先にも行ってさ♡ ミニス力履いてたのは僕との初デートだったからだよね♡」

「そ、そんな、んんっ♡」

有給なんて取ったことなかったのに当日に休むって言い出したから上司には驚かれたよ、なんて笑いながら早見は短く切り揃えられた爪先でのぞみの勃起しきった乳首をカリカリ♡ と弄る。

いやらしい声が出てしまうのが嫌で、のぞみは両手を自分の口に持っていくが、早見はその細腕を掴んだ。

「こーら♡ のぞみちゃんの可愛いお口を塞いでいいのは、僕のとチンポだけでしょ？♡ エッチでいやらしい可愛い声、ちゃんと聞かせて？♡」

「や、や、は、はなし、あっ！」

「悪い子は、腕結んじゃおうね♡ 痛くないようにするから、安心して♡」

掴まれた腕は、頭上でネクタイで結ばれてしまった。ゾツとする

のぞみを見下ろして笑う早見は、ネクタイを外したついでのようにワイシャツのボタンを上から二つ外す。

「や、やだ、やだ、解いて、やだっ！」

「あはぁ♡ のぞみちゃんをレイプしてるみたいだ♡ これはこれで興奮するなぁ♡」

「あぁんっ♡」

これはれっきとしたレイプなのにそんなことを言う早見に、のぞみは更に怯える。

これは、早見の中では、和姦なのだ。

しかし再び乳首を弄られてしまえば、のぞみは喘ぐしかできなくなる。

「居酒屋のバイトはやめてほしいな♡」

酔ってのぞみちゃんに触る

ヤツがいるし♡ のぞみちゃんは僕のなんだから、他の男に触られ
ちやダメじゃないか♡」

「い、いや、あ♡ あん♡ ああん♡」

「のぞみちゃんは痴漢に狙われやすいから、電車で痴漢されないよ
うに後ろにくつついてたんだよ♡ のぞみちゃんのいやらしいお尻
が僕のチンポ擦って大きくさせるのには困っちゃったけど♡」

「し、してな、あっあっ♡」

「そしたら人のいない駅のトイレになんて来るから、びっくりしち
やった♡ 家帰るまでチンポ我慢できなかったのかな？♡ こんな
ところでセックスしたいなんて、のぞみちゃんは本当にいやらしい
子だね♡」

「はうんっ♡ ちがう、ちがうう、あっ、やああ♡」

「僕はどんなのぞみちゃんでも大好きだから安心してね♡ チンポ我慢できないエッチな子でも、ちゃあんと優しくおまんこパコパコしてあげるから♡」

「いや、いやあつ、ああつ……♡」

止まらない早見の気持ち悪すぎる恐ろしい言葉に、のぞみは甘く喘ぎながらもしくしくと涙を流した。

なぜこんなことに、と自分の過去の行動を後悔するが、ずっと乳首を弄っていた早見がようやく手を止めたので、顔を上げる。

「のぞみちゃん、泣いてるの？ 僕とセックスできるのが、そんなに嬉しいんだね♡」

「ち、ちが」

「ハアハア、そんなにかわいいと、僕、困っちゃうなあ♡ ぢゆる

るっ♡」

「ああッッ！」

早見はのぞみの深い谷間に顔を埋め、歯を立ててそこを吸った。すぐに顔を上げた早見は、唇をぺろりと舐め、恍惚とした表情を浮かべる。

「はああ、なんて美味しいんだ♡　こんなにかわいい上に美味しいなんて♡　もつといっぱい食べたくなっちゃうよ♡　レロオッッッ♡　ぢゅぱっ、ぢゅぱっ♡」

「はうんっ♡　いや、やめ、やめて、あっあっ♡」

「この赤い乳首も、僕のために美味しく実ってくれたんだね……♡　ちゅるるるるるるるるっ♡」

「や、あッッッ♡」

「ハアハア、かわいい、かわいいよのぞみちゃんっ……♡　ぢゅっ

♡　ぢゅぷぷ♡　レロロオ〜ンツ♡」

「んああっ♡　や、だめ、だめ、ああんっ♡」

「ハアハア、かわいい、かわいすぎるっ、ぢゅううツツ♡」

両手で両側からプレスされた乳房は中央に乳首が集まり、早見は食べごろの果物のように赤く熟れたそこを右左順番に転がしながら舐めたり、思い切り吸ったり、甘噛みしたりと存分に弄ぶ。のぞみは腕を頭上で結ばれ動かせないため、むしろ胸を前に突き出すような体制になってしまい、早見を喜ばせた。

「ぷはあ……♡　のぞみちゃんの乳首は、本当に美味しいね♡　僕とのぞみちゃんに赤ちゃんができて、僕だけのおっぱいであつてほしいな♡　そうだ、赤ちゃんは人工乳だけで育てようか？　の

ぞみちゃんのおっぱいミルクは僕が飲むからさ♡　ね、いいよね？」

「い、いやあ……あつ、あつ♡」

「そっかあ、のぞみちゃんは自分のお乳で赤ちゃんを育てたいんだね♡　じゃあ、赤ちゃんが右のお乳を吸ってる時は僕が左のお乳を吸うよ♡　ねっ♡」

自分の子供を産ませようとしてくる早見が恐ろしくてのぞみは「いや」と言ったのに、早見はにこにこしながらのぞみの乳首を指先でくにくに♡　と弄る。

「赤ちゃん産むためには、こつちをしなきゃね♡」

「やつ！　やだっ、やめてっ！」

「ふふっ、のぞみちゃんの大事なところ、触ってほしそうにしてるよ♡」

「やあっ、あっ、ああっ♡」

早見の手がスカートの中に入り込み、下着越しに割れ目をなぞる。下着越しだと言うのに何度も何度もその割れ目をねっとり指で往復され、のぞみはびくんと身体を跳ねさせた。

「パンツ脱がせちゃうね♡」

「あっ!!　だめっ……!!」

「はい、腰上げて♡」

「やだやだ、やめてっ……!!」

「下ろすよ♡」

「いやあっ……!!」

筋張った指が下着に引っかかり、無理矢理腰を上げさせられて、下着が引きずり降ろされていく。下着が膝を越すと早見の手つきは

荒々しくなつて、下着を足から引き抜いた。その上、ぎゅっと閉じている両足を掴んで、無理矢理ひらかせ、のぞみの誰にも見せたことのない割れ目が、早見の前に晒されてしまった。

「わあ……綺麗なピンク色してるんだね♡ はあはあ……♡ えっ
ちで可愛すぎるよ、のぞみちゃんっ……♡」

「ひ、いや、やめて、はなして、見ないで、やだあっ……！」

とうとうしくしくと泣き出したのぞみだが、早見は息を荒げてのぞみのぴったりと閉じている割れ目をじつと見つめる。ずっと夢にまで見ていたそこは、想像以上によかった。いやらしくて、かわい
い。

「わあ♡ おまんこびしょびしょだよ……♡」

「ひっく……うう……」

「ねえ、どうしてこんなになってるのか教えてくれる？」

「し、知らないっ……」

「嘘ついちゃダメだよ♡」

自分でわかるでしょ？ ほら、ここと

かどうしたのかな？」

「やっ、やあああっ！」

早見は右手の中指をのぞみの秘部に埋めると、そのままぐちゅぐちゅとかき混ぜ始めた。のぞみはいいややと首を振る。

しかしすぐにその指を引き抜くと、早見はぐっしよりと濡れた自分の指に舌を這わせた。

「ほら、見て？♡ のぞみちゃんのエッチなお汁……♡ れろお♡

あは♡ すっごくおいしい……♡」

「うっ……うっ……」

自分の恥ずかしい体液を見せつけられ、のぞみは顔を背ける。

すると早見は「もつとよく見せて♡」と言つてのぞみの顔を掴み、正面を向かせた。

「ああ♡ 可愛いよ♡ のぞみちゃんのお顔もお目々も涙で潤んでてすっごいえっちだ♡ ああ♡ 舐めたい♡ 食べちゃいたいな♡」

「うつ…うつうつ」

あまりの言葉にまたぼろぼろと涙を流すのぞみを見て、「泣かないで♡」と言いながら、早見はその唇を塞いだ。キスなんて優しいものじゃない、貪るようなそれだった。

「んむっ！ ん、ん、ん、んんん！」

「ぷはあ♡ ね、お願い♡ 僕と結婚しようよ♡」

「やああ、やつ、やつ……！」

「あはあ……♡ キスしたら、もっとおまんこトロトロになってきた……♡ 嬉しいな♡ そんなに僕のチンポが欲しいんだね♡ かわいい♡ かわいいなあ♡ 健気なおまんこだね♡」

「ちがつ……あつ、やつ、だめえっ……！」

「ああ♡ かわいいおまんこだなあ♡ 僕専用おまんこ♡」

「ふあああんつつ♡♡」

早見は再び中指を割れ目に突き入ると、ぐりぐりと膣壁を押し込むように動かした。

「焦らすのも可哀想だから、早くチンポ挿れよっか♡」

そう言って、早見はズボンを下ろし、大きく膨らみ反り返ったそれを取りだす。その凶悪なモノを目の当たりにして、のぞみは青ざ

めた。

あんな大きいの入るわけない……。絶対痛い……。っ！

「やだっ……。やだっ……。！」

「大丈夫♡ 優しくするからね♡」

「は、はじめてだから……。！」

「えっ？」

「だから、ゆるしてくださいっ……」

半泣きで言うのぞみに、早見は数秒真顔でじっと望みの顔を見つめていた。

「……のぞみちゃん、処女なの……。？」

「は、はいっ……」

必死でのぞみがこくこくとうなずくと、早見は嬉しそうな笑みを

浮かべる。

「そっかあ♡

僕に処女捧げようとずっと取っておいてくれたんだ

ね♡」

「ひっ、ち、ちがつ……」

「じゃあいきなり挿れたらおまんこびくりしちゃうから、先に慣らそっか♡」

「え……？」

にっこりと嬉しそうに笑ったままの早見は、割れ目にある膨らみかけの蕾を親指の腹でくにゅっと押し潰した。

「ひゃうっ♡♡」

突然の強い刺激に、のぞみはびくんと体を跳ねさせる。

「のぞみちゃんはクリトリスが大好きだよね♡　いつもクリオナし

て、足ピーンってしてイッちゃうの♡　　かわいすぎて僕も何度も一
緒にイッちやったよ♡」

「んあっ、やつ♡　　なに言っ、んっ、んんっ♡♡」

早見はのぞみの家に侵入し、盗撮器を設置していた。ベッドの周
りに二台と風呂とトイレに一台ずつ。

「あは♡　　かわいい♡　　怯えてるの？♡　　大丈夫だよ♡　　のぞみち
ゃんは頭の先から足の先までぜんぶ僕のだけど、オナニーしてて
も怒らないから♡　　本当は僕に気持ちよくして欲しかったけど、僕
がいないから仕方なくオナニーで気持ちよくなってたんだよね♡」

「や、ちが、んああ♡♡　　ひう、あっあっ♡♡」

「自分の指を僕の指や僕のチンポだと思って、おっぱいやクリトリ
スやおまんこをいじいじしてたんだもんね♡　　今日からは僕がシて

あげるから、安心して♡ あ、でもものぞみちゃんのオナニーも生で見たいなあ♡ 今度見せてね♡」

「ふああああんっ♡♡」

すっかり勃起してしまった淫核を爪でカリカリ♡ と引っ搔かれたり、指の腹でぐりぐり♡ と押しつぶされたりすると、のぞみは腰を浮かせて悶えた。

早見の言う通り、クリオナばかりしているから、強く感じてしまふのだ。

「あっあっ♡♡ だめえ♡ だめ♡ あっあっあっあっ、ああんっ♡♡」

「こらこら♡ クリトリスでイッたらダメだよ♡ のぞみちゃんは今日、僕のチンポでイクんだからね♡ いっぱいきもちいいだろう

けど、我慢しようね♡」

「んっ、んうっ♡　むりいっ……♡」

「無理じゃないよ♡　ほら♡　がんばれ♡　がんばるんだよ♡」

「あああっ♡♡　あっ、あっ、あっ♡♡」

ガクガク震え出すのぞみを嬉しそうに見ていた早見は、急に手を止めた。

達する直前だったのぞみは、あと少しでイキそうだったのにと恨めしげに涙目で早見を見上げる。

「はーっ♡　はーっ♡」

「そんな顔しないで♡　かわいいなあ♡　これから、僕のチンポが入るか、おまんこ確認するからね♡」

早見はそう言って、のぞみの両膝の裏に手を差し込み、ぐいっ

大きく足を開かせた。

そしてそのまま割れ目に指を当てる。

「うーん、まだ狭そうだね♡ 指で拡げるよ♡」

「んんっ♡ や、広げないでっ……」

「だめ♡ ちゃんと見ないとわからないでしょ？」

「やああ……♡」

恥ずかしい部分を丸見えにされてしまい、のぞみは顔を真っ赤にして目を逸らす。もう快感に負けてしまったのぞみは、怯えた顔を見せなかった。

「じゃあまず一本♡」

「ひあ……！」

ずぷりと人差し指が中に入ってくる。それだけでのぞみはビクビ

クツと体を震わせた。

初めて触られたそこは熱くぬかるんでいて、狭くて、とても狭い。早見の指は第二関節までしか入らなかった。

「すごい締め付け♡ きゅうつてしてるよ♡ 痛かったかな？ごめんね♡ のぞみちゃんはクリオナばかりで、あんまりおまんこオナニーはしないよね♡ 僕のために自分でさえ触らないなんて、偉いなあ♡」

「はううん、ごめんなさ、あつ、ああつ……♡」

「あは♡ 大丈夫、怒ってないよ♡ 確かにすぐに僕のチンポを迎え入れる準備はできてないけど、その手間も嬉しいから♡ のぞみちゃんのおまんこは、僕以外何も知らないんだ……♡」

「んああ、やあ、動かさないでえ……♡」

ゆっくり出し入れされる指がくちゆくちゅ♡ と音を立てる。その度にのぞみは腰を揺らした。

「二本目は中指ね♡」

「んんんっ♡♡」

「どうかな？♡ ちょっと苦しそうだね♡ 大丈夫だよ、すぐ気持ち良くなるからね♡」

「ひあっ！♡ そこお…♡」

「あは♡ Gスポットみつけ♡ ここきもちいいねえ♡ もっとしてあげるからね♡」

「あっあっあっあっあっ♡♡ やっ、はげしっ♡ ひあっ、んああっ♡♡」

「はじめてなのにおまんこでこんな感じちやうなんて、のぞみちや

んえっちだね♡」

「ち、違っ……♡ わたし、えっちなんかじゃっ……」

「違うの？」

「んんんっ♡♡」

G スポットをぐりぐり♡ されたまま首を傾げた早見に尋ねられるが、のぞみはすぐに否定できない。

何せ、さっきからずっと、おまんこがきゅんきゅん疼いているのだ。

「ほら、やっぱりのぞみちゃんのエッチだ♡ 僕の指ぎゅーぎゅー締め付けて離そうとしないよ♡」

「ちが、ちがうのお、や、やあ、ひんっ♡♡ も、だめ、あああゝっっ♡♡」

「イツちゃダメだよ♡」

「んっ!？」

あと少しで絶頂に達するところで、再び指の動きを止められてしまう。のぞみはなんで？　と言いたげな表情で早見を見た。

「僕のチンポでイキたいなら、勝手にイツたらだめだよ♡　わかった？」

「……んん、うう、はいっ……♡」

「ふふ、素直な子にはご褒美をあげなくっちゃね♡」

早見は再び割れ目に顔を寄せ、ぱくりとのぞみのクリトリスを口に含んだ。

「ぢゅるるるっ♡♡」

「ひっ、あああああっ♡♡」

びくんつとのぞみは大きく仰け反り、背中を大きく浮かせる。しかし早見が両膝の裏を押さえているため、足を閉じることができない。

舌でころころと転がされ、時折強く吸われてしまう。のぞみはもう限界だった。

「あああっ♡♡ も、イク、イっちゃうよおっ、ああっ、ああんっ♡♡」

「まだダメ♡」

「ひぐっ♡」

また寸止めされてしまう。のぞみはもう泣きそうになっていた。

「も、やだよお、イきたい、イきたいっ……！」

「どうしようかな」

「やあっ♡」

わざとらしく考えるフリをして、早見は再度のぞみの中に指を入れる。そして先程よりも激しく動かし始めた。

ぐちぐちぬぷぬぷぬぽぬぽ♡♡

「んんっ、んんんん——っ！♡♡♡」

「だめだよ、イっちゃ♡ イくのは僕のチンポで、だからね♡」

「んううううっ！♡♡♡」

「あはは♡ そんなに腰振って♡ イきそうなんだね♡ でもダー

メ♡」

「あううっ…♡♡」

ぐぽんっ♡ と指が引き抜かれ、大量の愛液がぼたぼたとこぼれ落ちる。

「今日のはぞみちゃん危険日だから、たっぷり精子注いだら赤ちゃんデキるね♡ 嬉しいなあ♡ 僕とのぞみちゃんの赤ちゃん♡ のぞみちゃん似の女の子がいいな♡ あ、もちろんデキなくても心配しないだね♡ 毎日たっぷり注いであげるから♡」

「ひ、」

「君のおまんこに僕のチンポが入るところ見て♡」

いくら快楽でやられているとはいえ、のぞみは早見の連なる言葉に怯えた。しかし、早見は、膨張しきった自身のペニスを押し当ててくる。

そこでようやく、のぞみはこのストーカーに犯されそうになっている、という現実を思い出して我に返る。

「あ、ごめんごめん、ちゃんと動画撮らなきゃね♡ 僕とのぞみち

やんの初セックス♡　これから何度も何度も見直そうね♡　結婚式

で流すのもいいかも♡」

「ひい、い、いやあっ……！」

「あは、冗談だよ♡　のぞみちゃんのエッチなところ、他の人に見せるわけがないでしょ？　のぞみちゃんのおっぱいも、おまんこも、見ていいのは僕だけなんだから♡」

「やだ、やだっ……！」

「ほら、見て♡　のぞみちゃんのおまんこ僕がチンポがキスしてる♡　お口もキスしよっか♡　ぢゅぱっ、ちゅるる、れろれろれろおっ♡」

「ん——っ、ん、んむっ……」

唇を奪われ、舌を絡め取られる。のぞみは涙を浮かべて必死に抵

抗するが、早見の力には敵わなかった。

「はあ、可愛い♡ 好きだよ、のぞみちゃんっ……♡ れろれろれろおっっ♡♡」

「んんっっ♡♡」

「ぷは、はあ、限界だよのぞみちゃん♡ 挿れるね♡ 挿れるよ♡

ほら、見て、見て、見て！」

「あっ、いやああっ！」

ずぶずぶっ♡♡♡

ゆっくりと挿入されていく早見の肉棒。のぞみはあまりの質量に目を見開くが、しかし、すっかり早見に解されたそこは難なくそれを飲み込んでいき、痛みもほんの少しで、得たのは快樂ばかりだった。

「あ、あ、あああっ……♡♡」

「ああ、すごい、のぞみちゃんの中、あったかい……♡」

「あ、あ、だめえっ……♡♡」

「あったかくて、キュウキュウって締め付けられて、僕のチンポ歓迎してくれてるのがよくわかる……♡」

「ち、違っ……♡」

「ずっとこうしてたいよ♡ のぞみちゃん♡ のぞみちゃん♡
ろ♡ ちゅううう♡」

「ん、ふう、んむっ……♡」

「ああ幸せだよ♡ やつと君とひとつになれたんだね♡ 嬉しいな

あ♡ 夢みたいだ♡ 好き、大好き♡ のぞみちゃん♡」

「あ、あう、あううっ……♡♡」

長いキスが終わってようやく少し興奮のおさまった早見は、私たちの結合部を見て目を見開く。

「ハアハア……ちよつと血が出ちゃったね……♡」

「ん、んんっ……も、ぬいてえ……」

「あ、ごめんね♡ 初めてだから、痛いんだね♡ でも痛いのは今だけだから、僕に処女捧げた痛み、ちゃんと覚えておいてね♡ 次のセックスからは、気持ちいいだけになっちゃうから♡」

やはり気持ち悪いことを言う早見に、のぞみは再び恐怖する。

だが、その感情とは裏腹に、のぞみの膣内は早見をぎゅつと抱きしめるように絡みつき、子宮口は亀頭に吸い付くように降りてきていた。

「ああ、のぞみちゃん♡ 僕のこと好きなんだねえ♡ 嬉しくなっ

ちやうなあ♡　早く赤ちゃん作ろうね♡　いっぱい注いであげるから♡」

「や、やだあ、も、やなのお、やだやだ、んああ♡♡」

「あはは♡　こんな汚いトイレで処女捧げちやう女の子なんて、のぞみちゃんだけだよ♡　かわいいなあ♡」

ぱんっぱんっ♡♡♡

早見が激しく腰を打ち付け始めると、のぞみはもうそれに合わせて喘ぐしかなかった。

「あ、あ、ああんっ♡♡」

「はあ、はあ、はあ、のぞみちゃん、のぞみちゃん♡　のぞみちゃんのおまんこ、僕のチンポの形に変わってるね♡　僕専用のおまんこって、覚えさせなきゃね♡　ほら、わかる？♡　僕のチンポの形

♡
」

「し、しらな、ひああっ♡ やだ、抜いて、あ、あっ♡♡」

「じゃあ教えてあげる♡ ほらここ、カリ高っていうんだよ♡ これのおかげでのぞみちゃんのおまんこ引っ搔くたびにすっごく気持ちいい♡ はあ、このあと精子たっぷりぶちまけてあげるからね♡ のぞみちゃん♡」

「いやああっっ♡ あん、ああんっ♡♡」

「カリ首までおまんこのヒダヒダがまとわりついて、僕のチンポの形覚えようとしてるね♡ おまんこえらいえらい♡ よしよし♡ もうちよつと奥までいってみようか♡」

どちゅんっ！♡♡♡

最深部を突かれたのぞみは背を仰け反らせ、声にならない悲鳴を

あげ、達してしまった。

「~~~~~ッ！！！！♡♡♡♡」

「あゝ、きもちいい♡　すぐおまんこ締めてくるっ♡♡♡　あは♡　処女なのに、奥突かれてイッちゃったの？♡　のぞみちゃん、セックスのセンスありすぎじゃない？♡　そんなに僕のチンポで処女喪失できたのが嬉しいのかなあ♡」

早見の言葉など聞こえていないのぞみは、あまりの快感に頭が真っ白になっていた。しかし、早見は責めをやめない。

「あ、あう、あ……♡」

「わかるかな？♡　ここが子宮の入り口♡　ここに精子びゆるびゆるっ♡　って出して、赤ちゃんデキるんだよ♡　今日もちちゃんと出してあげるからね♡　元気な赤ちゃん孕もうね♡」

「や、だめ、あかちゃん、だめえっ……！」

「なんで？♡ 僕との赤ちゃん欲しくないの？」

「ほしく、な……んああっ♡♡」

「あはは♡ そっか♡ 欲しいんだね♡ うれしいな♡ 今日赤ちゃんデキたら、デキ婚になっちゃうなあ♡ 僕はいいけど、のぞみちゃんはそのうちの気にする方かな？♡ 明日婚姻届出しに行けばデキ婚ってバレないから大丈夫だよ♡」

「あ、あ……いや……んんっ……！」

再び唇を重ねられると同時に、中に入っているものが質量を増した気がした。

「ん、ふう、んんっ……♡ んむう……っ♡」

「じゅるじゅるっ♡ ぷは、ああ、幸せだよ♡ ずっとこうしてた

い♡ 好き、大好きだよ、のぞみちゃん♡」

「あ、ん、ああん♡♡」

「はは、これは婚約セックスだね♡ 処女喪失セックスが婚約セックスで、孕ませセックス♡ のぞみちゃん、絶対責任取るからね♡ 結婚して、子供産んでね♡♡」

「やだ、いやあ♡…あんあん♡♡」

「泣き顔かわいすぎるよ♡ もっといじめたくなっちゃう♡ ほら見て♡ のぞみちゃんの子宮にキスしてるよ♡」

ずぼっ、ぐちゅ♡ ぐぼっ、ずっ、ずっ、ぐぼん♡♡

何度もいやらしい音を立ててゆっくりと奥まで差し込まれ、その度にのぞみは声を上げてしまう。

「あ、あ、ああん♡♡」

「気持ちいい？♡ はあ、すごい締まる♡ のぞみちゃんもイキまくりだねえ♡」

「あ、あつ♡♡ やだあ、も、ぬいてえ、あつ、ああつ♡♡」

「えー？♡ でも、のぞみちゃんのおまんこは僕のこと離さないみたいだけどなあ♡」

「ち、ちがつ……ひうつ♡」

「んー、じゃあ、おまんこ抜いてあげるね♡」

ずるるるるる……♡

抜けるギリギリまで引き抜かれ、のぞみはほっと息をつく。が。

「やっぱりやーめた♡」

ぐっぽおおっ！♡♡

「ひゃあんっ!!♡♡」

次の瞬間にはまた一気に最奥まで貫かれ、のぞみはビクン悲鳴のような喘ぎ声をあげた。

「やああ、ひ、なんで、ああんっ♡♡」

「のぞみちゃん、もうおまんこ限界そうだからさ♡　そろそろイかせてあげるね♡」

そう言うと、早見は今までよりも激しく腰を打ち付け始めた。パッ！♡　ぱちゅっ♡　ぱちゅんっ！♡♡　という音が個室どころかトイレ中に響き渡る。

「ひうううつっ♡♡　やあ、つよいの、やつ♡♡　やめて、やめてえつつ♡♡　ああんつつ♡♡」

「ごめん無理♡　はあ、もうすぐ出るかも♡　僕の精子でいっぱいにしてあげるからね♡」

「やだあ、なかはだめっ♡ あんんっ♡ やら、やめ、ああっ♡♡」

「はあ、のぞみちゃん、可愛すぎるっ、やつとのぞみちゃんを孕ませられるんだっ♡」

テンションの上がりきった早見は、のぞみの胸を掴み乳首を摘みながらさらにピストン運動を強めた。

ばちゅっばちゅっばちゅっばちゅっ♡♡

ぐに、くりくりくり、ぐににいゝゝっ♡♡

「ああんっ♡♡ ちくび、だめえっ♡♡ あ、あ、ああんっ♡♡」

「あはは♡ だめじゃないでしょ♡ こんなに感じてるくせに♡

ああ、もう、出そうだっ♡」

「だめ、だめえっ♡♡」

「君を孕ます男の顔、ちゃんと見なきゃダメだよ♡♡」

「だめ、ほんとうに、あかちや、できちやうからああっ♡ ああん♡♡♡」

「あー出る、出る出る出る出るっ♡♡」

「やああああっっ♡♡♡♡♡♡」

びゅーっ！♡ どぴゅっどぷっ♡ ぶぴゆるるるっっっ♡
♡♡♡

最奥にぴったりと亀頭を押し付けられた状態で大量の精液が注ぎ込まれたのぞみは、ビクンビクンっ♡ と身体を大きく跳ねさせ、再び達してしまう。

「くううつ、はーっ、ふーっ、ふーっ」

「あ、あああ…♡♡」

「のぞみちゃんもイッちゃったの？ ほんとかわいいね♡」

激しく達したせいでばんやりするのぞみの頬を嬉しそうに撫でた
早見は、また腰をビクビクと震わせた。

「あー、やばい、また出る、出ちゃう、のぞみちゃんかわいすぎて
射精止まらない……♡」

ぶぢゅっぶぢゅっ♡

全て出し切ったあとも、早見はしばらくのぞみのナカに留まった
まま余韻に浸っていた。

一方のぞみは、放心状態のままぐったりとしている。そんなのぞ
みを見て満足そうな笑みを浮かべると、早見はゆっくりとペニスを
引き抜いた。

「……んう……♡」

どろお……♡

栓がなくなったそこから、大量に出された白濁が溢れ出す。

「は、うう……♡」

「こーら♡ 大事な精子、こぼしちゃダメでしょ♡」

全く怒っていない顔で言いつつ、早見は垂れてくる精液を手で掬い、のぞみの下腹部に擦り付けた。

「な、に……？」

「今からこの中に僕たちの赤ちゃんができるんだよ♡ 楽しみだね、のぞみちゃん♡」

「や、ああっ……」

下腹部に当てられた手からはじんわりと温かさを感じる。その感触にぞわっと鳥肌を立てたのぞみは、力なく早見の手を振り払った。

「あは、大丈夫♡ 妊娠してもずっと一緒にいてあげるからね♡」

これからよろしくね、僕のお嫁さん♡」

「……う、ううつ……」

上機嫌な早見は、何度も何度ものぞみにキスをしてくる。のぞみはもう拒否する体力は残っていないくて、されるがままに唇を貪られていた。

製品版に続く

社畜勘違いストーカーの 女子大生連続孕ませレイプ__体験版

2022年3月11日発行

♡ どん丸／がら堂

♡ Twitter : @donmar18